

《連載》

至誠の足跡 (3)

描かずして表現する日本画家 大山忠作

【要約】

福島県二本松に生まれた日本画家。鯉の画が多いが、どの画もそれだけではないような気がする。禅僧の良寛の画もあり、何か深い日本の精神を表現しているのではないかと思わせるところがある。一見したところ鯉を描いた画が多数あるが、水面、鯉そのもの、底など焦点を違ったところにあてていると思われる画がある。どの画も何か背景にあるのではないかと思わせて、私には関心のある不思議な画家である。今年は、大山忠作の画を多数所蔵する大山忠作美術館開館10周年記念であり、特別企画展もある。

●Key words : 大山忠作、日本画家、鯉の画、八ずの戒め

階層を想像させる画

ある日、講演のため福島県二本松の駅に降り立った。時間があつたので、案内所でどこか見どころはありませんかとたずねた。駅のそばに美術館があるというのでいった。その画30数点のうち、鯉を描いた(ように見える)画が数点あつた。

展示されている画のうち、鯉を描いているように見える画(写真1)を見て釘づけになつた。鯉だけを描いているのではないと思えた。鯉の画では、花びらが浮かんでいる「水面」が具体的な線も水面も絵具で描かれていないのだが、鑑賞するものこのころには水面が想像されてくる。水面を描かずして、水面を表現しているのだ。

別の画は、水面が描かれず、底が描かれていた。水面もあつたはずだが、全く描かれていない。底に焦点があてられているのだ。すなわち、水面上の空間、水面、鯉が生きている水中、底、(さらにその奥)というように階層が描かれているといふことができる。

私は、西田哲学でいう意識の階層を思い起こし

た。西田哲学は、自己の心の階層をいう。私たちはさまざまな意識現象を起こす。西田によれば、作用には浅いもの深いものがある。意識の階層がある。意志の立場からは、種々の作用の階層を知ることができる。意識現象が於いてある場所が深まっていく。我々の意識は、焦点をあてた場所のものが意識される。判断の場所、感覚の場所、思考の場所、感情の場所、意志作用の於いてある場所、・・・絶対に対象的に観察できない場所。

(写真1) 「春池」



下記は西田の言葉の引用であるが「情意」とは、感情と意志である。

「知識というものの中において、少なくとも種々の種類があり、種々の次位を区別し得ると思う。」【西田4:291】

「種々なる作用の区別や推移が意志の立場において見られ得る」【西田4:267】

「意識するということと、知識の対象界に映すということとがすぐ一つに考えられるが、厳密なる意味において知識の対象界に、情意の内容を映すことはできない。・・・情意の映される場所は、なお一層深く広い場所であればならぬ。情意の内容が意識せられるということでは、知識的に認識せられるということではない、知情意に共通なる意識の野はそのいずれにも属せないものでなければならぬ、いわゆる直覚をも包んで無限に広がるものでなければならぬ。最も深い意識の意義は真の無の場所ということであればならぬ。」【西田4:224】

禅に関する画と書

江戸時代の有名な禅僧、良寛の画もあった。「無」という書もあった。展示されている画の傍らに画伯の言葉がそえられていた。画伯は、人や自然を描いたのではなく、こころ、自分を描いているのであった。描かずに描くという禅のような表現をしていると思った。

建物の画があったが、その前に本人であるはずの人物が描かれていた。「私」も描かれているのだ。全体が「私」を描いた画なのだろう。

「光池游々」(写真2)で、意識の階層を味わってみたい。鯉が7尾泳いでいる。中央からやや右上に太陽のような輝く円、ほぼ全面にタイルのような模様がある。鯉よりもこれが強い印象を与える。同様の模様は「揺曳」にも描かれている。鯉の影が描かれているが、そこは「底」であることに異論はない。

さて、問題はタイルのようなものが於いてある場所は水面か底面か、前の画と違って明瞭に描かれているが、それが何なのか鑑賞者の自由な解釈に任せる。栗城によれば2説があるようだ。

「泳ぐ鯉と水面に当たった太陽の光が、屈折しながら池の底に届いて不定形の紋様を作る様子だ。それが、ゆらゆらと変化してやまない。水が織りなす影の紋様を発見したときの大山さんは、得意満面であったに違いない。しかしある美術評論家は、この紋様を池の底の敷石だと書いておられた。筆者の水紋様説と比較して見ていただきたい。」(栗城)

鑑賞する人に様々な解釈がされて幅広く鑑賞できる作品がすぐれた芸術なのであろう。筆者(大田)は同様のものを見たことがあるので見方は決まっているが、鑑賞の邪魔になるので、ここには書かないでおきたい。

栗城の「太陽の光が・・・池の底に届いて・・・(表面に)紋様を作る」という見方は卓見である。紋様が水面であり、「底」を通ってきた光が紋様を作っているというのだ。水面の紋様は底なくしては映らないのだ。「底」はどこまで深いのだろうか。

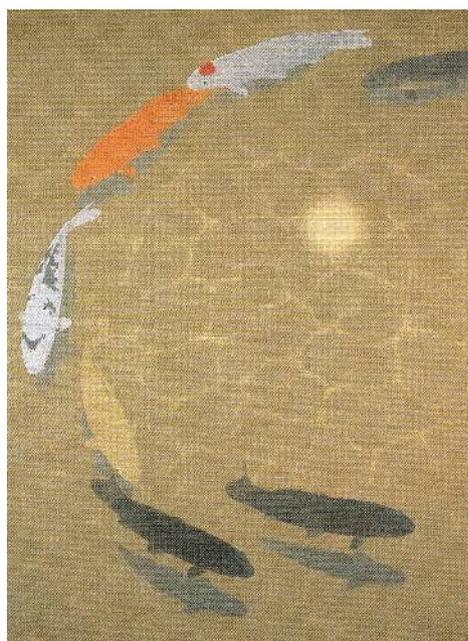
哲学者西田幾多郎は、「我々の自己の奥底に、どこまでも自己を超えて、しかも自己がそこからと考えられるものがある」【西田11:422】という。大山は禅に造詣が深い。自他不二という禅の哲学だ。

を表現しようとしていたのではないかとも思うのだ。自他不二について、哲学者小坂国継はこういう。

「西田のそうした矛盾的な表現を仔細に検討していけば、そこにはある一貫した考えがみとめられる。それは、通常、対立的に考えられている主観と客観、個と普遍、自己と他己が一体にして不二なるものであるという自覚であり、またものごとを自己の側からではなく、反対に、世界の側から見ていこうとする姿勢である。いわゆる自己というものがまったく消失してしまったところから物や世界を見、自己が物や世界になりきったところから行為していこうとする考え方である。」
(小坂)

自他不二の「他」はすべての人間の自己の根底、絶対の他をいう。根底の射影が自己や水面の紋様などに当たるとみてよい。このように、大山の画には見えにくい階層が描かれているようだ。

(写真2) 「光池游々」



争わず、怒らず、奢らず、至誠の生活指針

大山忠作は、大正11年(1922)、現在の二本松市根崎に染物業を営む大山豊治・きくの次男として生まれた。二本松第二尋常高等小学校卒業後に上京、東京美術学校(現 東京芸術大学)で日本画を学んだ。第2次世界大戦の時は、学徒出陣のため繰り上げ卒業となり戦地へ向かった。戦後、画の制作に励み第2回日展で「O先生」が入選。以後、人物から宗教、花鳥、風景画まで幅広い題材の作品を発表し続けた。日展においても、理事長、会長としてわが国の芸術文化の振興・発展に尽力された。平成18年には、文化勲章を受章した。平成21年2月19日に86歳をもって逝去。なお、女優の一色采子さんは、画伯の娘である。

大山のエピソードは、栗城の著書に紹介されているが、栗城によれば、家族を大切にした人だ。また、「八ずの戒め」をモットーとしていたということだ。「争わず、怒らず、奢らず、逆らわず、飽きず、焦らず、急がず、転ばず」だという。日本的な至誠の精神を物語っていて、とても難しいことだが、これを指針にした人だ。

大山忠作美術館

福島県二本松駅前到大山忠作画美術館がある(写真3)。大山家から寄贈された画を多数所蔵しており、順次、展示される。

(写真3) 大山忠作美術館



大山をしのぶものとして、日本松北小学校に建立した筆塚や、「岳温泉十二支めぐり」がある。

本年10月は、美術館開館10周年記念にあたる。
(大田健次郎 記)

文献

栗城正義『安達太良の虹 一大山忠作伝一』

歴史春秋社

西田幾多郎

西田幾多郎の著作からの引用は、岩波書店、西田幾多郎全集(昭和40年—41年)により、第11巻54頁の場合【西田11:54】のように、巻数と頁を表示する。引用にさいしては、現代仮名遣い、現代漢字に書き改めている。

小坂国継「西田哲学の基層」岩波現代文庫、
294頁

注

- 1) 大山忠作の案内は、主に、大山忠作美術館のホームページを参照した。
<http://www.nihonmatsu-ed.jp/oyama/>
- 2) 大山忠作の画の画像の掲載は、著作権者の許諾を得た。
- 3) 「至誠」については、『マインドフルネス精神療法研究』3号、2017 p101～、『創造的直観への実践』日本マインドフルネス精神療法協会)

文中、敬称は省略した。